

# 卵

夢野久作

青空文庫



三太郎君は勉強に飽きて裏庭に出ました。

空には一面に白い鱗うろこぐも雲が漂うて、淡い日があたたかく照つておりました。その下に立ち並ぶ郊外の家々は、人の気はいもないくらいヒツソリとして、お隣りとの地境じざかいに一パイに咲いたコスモスまでも、花ビラ一つ動かさずに、淡い空の光りをいろんな方向に反射しておりました。

その花の蔭の黒いジメジメした土の上に初生児あかんぼの頭ぐらいの白い丸いものが見えます。

「オヤ……何だろう」

と三太郎君は不思議に思い思い近寄ってみますと、それは一つの

大きな卵で、生白い殻からが大理石のような光沢を帯びておりました。その横の地面に竹片たけぎれか何かで字を書いて、卵と一いっしょ所に輪形の曲線で包んでありました。

……三太郎様へ……露子より。

三太郎君はハツとして慌てながらその文字を下駄げたで踏み消しました。そうしてコスモスの花越しに、空地続きになっている裏隣りの二階をあおぎました。

その二階は階下と一所に雨戸が閉まっかけていて「貸家」と書いた新しい半紙が斜めに貼ってありました。露子さんの家は、ゆうべ三太郎君が睡っているうちに、どこかへ引越してしまつたらしいのです。

露子さんと三太郎君が初めて顔を見合つたのは、今年の春の初めでした。それは露子さんの一家が引き移つて来てから間もない或る日の事でしたが、その時には、今貸家札を貼つてあるあたりの二階の障子を何気なく開いて、欄干らんかんからこちらの庭を見下した露子さんの視線と、座敷の障子を一パイに開いたまま勉強していた三太郎君の視線とが、ホンの一秒の何分の一かのうちにチョツトためらいながらスレ違つただけでした。露子さんは、そのまま冷やかな態度で眼を伏せて障子を閉めながら引つこんで行きましたし、あとを見送つた三太郎君も静かに立ち上つて障子を立て切つてしまつたのです。

それから後、きのうまで数箇月の間、露子さんと三太郎君は毎

日のように顔を合わせておりました。お互いに恋を感じていることを、よく知り合っていないながら、お互いにわざとヨソヨソしくしている事を同時に感じながら……ウツカリ視線でも合うと、慌てて眼を外<sup>そ</sup>らして、逃げるように家の中へ引っ込んでしまうのでした。二人はこうして顔を合わせるたんびにお互いの態度を真似るのです。そうしてトウトウニツコリし合う機会が一度もないうちに、別れなくてはならなくなったらしいのです。

二人は何という愚かな二人だったでしょう。

なぜあんなに固くるしくまじめな態度を執<sup>と</sup>ったのでしょうか。

なぜあんなに、お互いの恋を警戒し合ったのでしょうか。

……三太郎君はその原因を知っていました。

……ホントウの事を云いますと、あの露子さんの顔を初めて見た晩に、三太郎君の魂は、よく眠っている三太郎君の肉体をからだソツと脱け出して行つたのです。そうしてちようど今三太郎君が突立っている黒い土の上で、待ちかねていた露子さんと忍び合つたのです。そうして、それから後三太郎君の魂は毎晩のように、同じところで露子さんと出会つて、ささや囁き合い、泣き合い、笑い合つたのです。

もつとも最初のうちは三太郎君も、それを自分一人の幻想だと思つて、ひと独りで恥じていたのです。露子さんのうしろ姿や、着物

の片影を見ただけでも、済まない、恥かしい、空おそろしい……  
というような気持ちに囚とらわれて、吾れ知らず顔面の筋肉を緊張さ  
せたものです。

ところがそのうちに露子さんも矢張り、三太郎君と同じ気持ち  
でこちらを見ていることがわかって来たのでした。露子さんが三  
太郎君と顔を見交みかわしたんびに見せる何ともいえない、つめたい緊  
張した表情が、そうした露子さんの心の底の秘密をありのままに  
物語っているのです。三太郎君の幻想が決して三太郎君一人の  
気の迷いではない。疑いもなく二人の魂がソツクリそのまま肉体  
を脱け出して、毎夜毎夜ここで媾あいびき曳ひをして楽しんでいるのだ：  
…という事が次第にハッキリと三太郎君に意識されて来たのです。



そうして、それと同時に、二人がこうして現実の恋を恋し得ないで、魂だけで忍び合つて満足をしているのは、決して恋を恐れているのではない。現実の恋から必然的に生まれる「ある結果」を恐れ合っているからだ……という事までも、透きとおるほどハッキリと三太郎君に理解されて来たのでした。

二人が昼間のうちに見合わせる眼付きは、こうしていよいよ冷やかになつて行くばかりでした。そのかわりに二人の心は、日が暮れるのを待ちかねてこの地境の黒い土の上で逢おう瀬せを楽しみ合うのでした。

そのうちに夏が過ぎると、その黒い土の上に、誰が種た子を蒔まい

たともなく、コスモスが高やかに生い茂りました。そうして秋に入ってから、まぶしいほど美しく満開したと思う間もなく今日になって、この出来事が起つたのです。

三太郎君は奇妙な、恍惚うっとりとした気持ちになって、その大きな卵をソツト抱き上げてみました。それはよく見ると青いような、黄色いような、半透明な殻の中にトロトロした液体を一パイに充実させているらしい水ぐらいの重たさのものでした。その太陽に向っている半面は暖かくなっていました。

三太郎君は、それから毎晩その卵を抱いて寝ました。

そのつめたい殻が、三太郎君の肌とおなじ暖かさになると、卵

の中からスヤスヤという寝息が、かすかに聞えて来るように思われしました。しかも、それが三太郎君の妄想でない証拠には、ためにしにチョットゆすぶってみると、その寝息の音がピッタリと止まるのでした。そうして、それと一所にお乳ちちのような、又は洗い粉のような甘ったるいにおいが、ほのかに湧いて来るのです。

三太郎君は卵が可愛こわゆくなりました。毎晩暗くなるのを待ちかねて、毀こわさないようにソツと抱いて寝るのが、この上もない楽しみになって来ました。そうして夜が明けるとすぐに夜具を押し入れに入れて、自分の寝ぬくもりの籠こもった敷布団の間にソツト入れてやるのでした。こうして独身のまま、かあいい卵を抱いて生涯を過したらばどんなに気楽で嬉しいだろう……なぞと空想した

りしました。

そのうちに卵は次第に変化して来るようでした。殻の色が黄色から桃色……桃色から茶色へ……茶色から灰色へ……そうして中から聞こえる寝息と思つていた物音が、夜の更けるにつれて高まつて、しまいにはウンウンという唸り<sup>うな</sup>声かと思われるようになりました。

三太郎君は気味がわるくなつて来ました。……きつと卵が孵<sup>かえ</sup>りかけているのに違いない。そうして中に居る或る者が殻を破り得ずに苦しがつているのに違いない……と思つて……。しかしそのうちに、ひとりでに内側から破れるであろう、万<sup>も</sup>一<sup>し</sup>早まつて割

つたりしては大変だ……と我慢しいしい抱いておりました。

秋が更けて行くに連れて卵はだんだんと灰色から紫色にかわつて行きました。それは死人のような気味のわるい色で、しまいは薄紅い斑点さえまじつて来ました。卵の中のうなり声も次第に高まつて、齒をむき出した野獸か何ぞのように物狂おしく力強くきこえて来ました。時折りはキリキリと齒<sup>はぎし</sup>切りをするような音さえ殻の中で起るのでした。

三太郎君はそのたんびにゾツとさせられました。夜通し眠られぬ事さえありました。これはタマラヌ……と心配しながら……。

すると或る夜の事、三太郎君がウンウン唸る卵を懐ふところに入れたまま、ウツラウツラと睡っているうちに、不意にどこからともなくシヤが嘎れた声が聞こえて来ました。

「オトウサンオトウサンオトウサンオトウサンオトウサン」

それは死に物狂いに藻も搔がいている小さな人間の声のようでした。三太郎君はハツと眼を醒ましました。

卵は三太郎君のミゾオチの処で、大病人のように熱くなっていました。その中から放散する小便のような、腐った魚のようなあたたかい臭気においが夜具の中一パイに籠こもっています。

三太郎君は慌てて卵を抱え直すと、そのまま起き上って、大急ぎで雨戸をあけました。……もとの処に返しておこう……という

ような気もちで足探りしいしい庭にわげた下駄を突っかけましたが、あまりあわてておりましたせいか、思わず前にノメリそうになった拍子に、真暗なお庭の沓くつぬぎ脱石のあたりへ卵をコロリと取り落しました。……と同時にバツチャリと潰れた音がしたと思うと間もなく、生あたたかい、酸っぱいような小便のにおいがムラムラと顔に迫って来ましたので、三太郎君は、ヨロヨロとあとしざりしながら顔をそむけました。

空には一面に星が散らばっていました。

三太郎君は、あとをも見ずにピツシヤリと窓を閉めました。全身の汗がヒヤヒヤと冷え乾いて行くのを感じつつ、寢床にもぐつて、ワナワナとふるえておりましたが、そのうちにウトウトした

と思うと、又、ハツと眼を醒ましました。あとを掃除しておかなければならぬと思つて……。

恐る恐る雨戸を開いて見ますと、いつの間にか夜が明けて、外はアカアカとした小春日こはるびより和でした。裏庭の隅にはまだ、コスモスの白い花が、黒い枝の間にチラリホラリと咲き残っています。

沓脱石の処には何のあとかたもありませんでした。おおかた昨夜のうちに近所の犬か猫かが来て嘗なめてしまったのだらうと思われる位キレイになっておりました。

三太郎君はホツとしました。そうして何喰わぬ顔で朝食前の散歩に出かけました。



裏の家には誰か又新しい人が引越して来るらしく、貸家札がキ  
レイに剥<sup>は</sup>ぎ取られてありました。



# 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年8月24日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：江村秀之

2000年7月4日公開

2006年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 卵

夢野久作

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>